

ディグナーガの *Pramāṇasamuccaya* およびその自注 (*vyṛtti*) の第一章は直接知覚 (*pratyakṣa*) の記述と議論にあてられ、そこでは感官知を始めとする各種の直接知覚があげられている。しかし、その中に含まれるヨーギンの直接知覚についてのディグナーガの記述はあまりにも簡潔でありその詳細は明らかではない。その一方、ダルマキールティは、*Pramāṇavārttika*, *Pramāṇaviniścaya*, *Nyāyabindu* 等の著作において、直接知覚の一種としてのヨーギンの知について、ディグナーガのそれに比すればより多くの記述を残している。またそれらに対する注釈者たちの解釈をも併せて考えるならば、すでに指摘されているように、そこで論じられるヨーガ、ヨーギン、そしてその知は、少なくともある部分においてはヴァスバンドウの *Abhidharmakośa* (AK) およびその自注 (*-bhāṣya*, AHBh) における記述に代表されるようなアビダルマ的修道論を前提としたものと考えることが出来る。したがって伝統的な〈修習によって生じる慧〉が、ヨーギンの直接知覚として仏教認識論における直接知覚説の枠組みのもとに把握し直されたということも出来るだろう。このヨーギンの直接知覚の特徴をディグナーガ、ダルマキールティおよびその後の注釈者たちの記述や、その前提となっていると考えられる AK, AKBh その他のアビダルマ文献の修道論的記述の内容から、修行の実践主体がどのように捉えられているかを検討したい。そこで問題となることの一つとしては、ヨーギンの修習とそれから生じる直接知覚の対象としての「四聖諦」や、ダルマキールティがヨーギンの直接知覚から排除する「不浄」や「地遍」等が、アビダルマ諸文献中での取扱いとどのように関連するかということであろう。また、ダルマキールティはヨーギンの直接知覚が明瞭に顕現し無分別であることを「修習より生じる」という点によって説明し、そのことを愛欲や憂い等に支配された者たちに生じる非実在を対象とする知を喩例とすることによって示そうとしているが、これは反復経験 (*abhyāsa*) によって生じる知の明瞭性と無分別性というものが、ヨーギンの直接知覚と通常人のある種の惑乱とに共通しているということでもあり、人間の〈迷〉と〈悟〉のいずれにも共通する本性ということにもなるであろう。その場合に導き出され得る人間観がどのようなものであるかということも検討を要する問題である。

〈キーワード〉 ディグナーガ　ダルマキールティ　ヨーギンの直接知覚　アビダルマ